

ライフスタイルプランナー 英国研修旅行報告

2005年 9月23日(水)～30日(水)

視察先記録

9月23日(金)

09:00 成田空港特別待合室集合

1. 参加者自己紹介
2. 町田団長より挨拶
 - 今回の研修は3度目の英国と言う事で、英国の総集編。テーマは「温故創新」。常に、「プロは何をなすべきか？」を頭において、研修に臨んで欲しい。
 - 視察プログラムは、インテリア関係の2つのメジャーな国際展示会や、「アーツ&クラフツ運動」で知られるウィリアム・モリス博物館、さらにオックスフォード、コッツウォルズ地域への訪問と、非常に盛りだくさん。
 - ちょうど家族的規模のグループなので、楽しいコミュニケーションを！
3. 旅行社より旅程説明

11:00 成田空港発 (VS-901)

15:20 ヒースロー空港着

ロンドンの、古さと新しさの入り混じる街並を見ながら、バスでホテルへ。

19:00 夕食&視察スケジュール打ち合わせ (於：ホテル内レストラン)

9月24日(土)

◆ WILLIAM MORRIS GALLERY (ウィリアム・モリス・ギャラリー)

ウィリアム・モリスは、19世紀の英国で活躍した画家であり、工芸デザイナーであり、作家であり、詩人であり、会社経営者であり、社会主義運動家です。モリスの多彩な業績の中でも、昨今は装飾デザイナーとしての認知度が高くなってきました。彼のデザインは、英国のみならず世界中のファンに愛されていますが、特に日本人にはファンが多いようです。理由はいろいろあると思いますが、やはり日本人が古来から愛してやまない花鳥風月の自然がモリスのデザインモチーフになっているからではないでしょうか。

William Morris Gallery
Lloyd Park Forest Road London E17 4PP
Tel. 020 8527 3782





10:00 ウィリアム・モリス博物館

デザイナー/工芸家として優れたアーティストであるばかりでなく、詩人でもあり、また、急進的な社会主義論者でもあったモリス。特にその活動は、産業革命によるマスマシプロダクションと経済合理主義に反旗を翻し、自然に題材を得た手作りの芸術/工芸を提唱・実行した、「アーツ&クラフト運動」として知られている。

そのモリスの足跡を辿る事も、今回の研修の目的のひとつである。このロンドン郊外の博物館はモリスが青少年期を過ごした邸宅だが、この後訪問する、「モリス・ソサイエティー」「ケルムスコット・マナー」等、全てにモリスの自然をモチーフとした、装飾的ではありながら華美に走り過ぎない芸術性にあふれた作品があふれている。特に、銀色に輝く柳の葉をモチーフにした作品群が印象的であった。

また、晴天のすがすがしい朝、美しい庭園を散策した事も忘れがたい。

12:00 クイーン・メアリー・ローズ・ガーデン (リジェント・パーク内)

満開とはいえないまでも6部咲き程のバラ園で、ちょっと一息。

何百種類ものバラに、それぞれユニークな名前がついている。それらに見とれて歩き進むうちに、いつの間にか広大な公園に出ている。ここにも「古くて新しいイギリス」を象徴する、モダン・アートのオブジェがそこかしこに見られ、それらが見事に周囲の自然と調和している。

12:30 ポートベロー・マーケット

毎週土曜日に開くアンティークの市場で、大賑わい。十字路の前後/左右にびっしりと小さな店が並び、中に入ると意外と奥が深く、また別の路地商店街が目の前に広がったり……。とにかくその店舗数と訪れる人の数に圧倒される。

ガイドさんからの厳重注意もあり、みんなバッグはしっかり抱え込んでスリ対策万全。おかげさまで、今回のツアーを通じ、誰もイギリスの賢いスリの餌食にならずに済みました。ガイドさん、有り難う。

マーケットで各自昼食を済ませ、バスでハマスミス橋付近へ。そこで下車し、川沿いを散策しながら、

14:30 ウィリアム・モリス・ソサイエティー

ここは、モリスが一時ロンドンでの芸術/社会活動の拠点とした建物で、数々の出版物を印刷した印刷機や活版等が保存されている。また、2階の集会室は、当時のマルクス共産主義に傾倒する急進派の結集の場であり、ここで議論を重ねたであろう錚々たる面々の写真がずらりと並んでいる。

16:00 ビクトリア&アルバート博物館

英国及び世界の芸術/工芸品を、歴史を追って展示している、広大な博物館。じっくり見れば丸一日はゆうにかかるが、今回は残念ながら駆け足でさわりのみ。その展示の仕方、照明の使いが素晴らしい。モノを美しく見せるだけでなく、教育的効果も抜群。一日子供をつれてブラブラすれば、いつの間にか歴史も学び美的感覚も養われると言うもの。

特筆すべきは、あちらこちらに何気なく折りたたみ椅子がぶら下がっており、どこでも座ってゆっくり鑑賞できるようになっている点。鑑賞のみならず、学生がスケッチの練習をするための設備があったり、子供が昔のドレスを試着できるようになっていたり、要は、市民のための体験型博物館なのである。後日訪問する、KLCの学生もここに通り、多くの課題をこなしていったとの事。展示品の前で列をなして、やっと横目で作品を流し見するのがやっとのどこかの博物館とは大違いである。

17:00 ここで解散し、コンラン・ショップや近隣のインテリア・ショップ等自由散策

夕食（於：近隣のレストラン）

9月25日（日）

◆100%DESIGN:

毎年9月ロンドンで開催される、インテリア関係の見本市（コントラクト・住宅用室内装飾、家具、照明、フローリング、キッチン、浴室、建築設備・付属品）<会期>9月22日（水）～25日（日）<開場>10:00～18:00<URL><http://www.100percentdesign.co.uk/>



10:00 「100%デザイン」見学

この展示会は、1995年、まだ世に出ていない才能あるデザイナーに発表の場を与え、なお且つ来場者が楽しめるイベントを目的に、2人の若者が企画/開催した。そのうちの一人、Ian Rudge氏のお話を聞くことができた。

当初は、キングスロードの小さなテントで初め、来場者数も8,000人程の小規模なものであったのが、年を追う毎に急速に膨れ上がり、3年目の開催で今回の常設の見本市会場に移したとの事。現在は来場者約36,000人。70カ国から参加。近年展示も多様化し、3年前に「100%ディテイルズ」という建材を中心とした展示会を隣接会場で同時開催することとした。

この展示会の特徴は、展示者/作品を審査するパネル(審査会)が設置されている点。通常の展示会は、いわゆるブース貸しで、一定の賃借料を払えば早い者勝ちで展示する権利を得る。こちらは、申し込みをうけた後パネルで。「展示作品として十分にコンテンポラリーな特徴を備えているか?」という基準で審査を行い、パスしたものだけが展示スペースを得る。現在の所、パスする確率は50%ぐらい。

海外での開催については、これまでモスクワでは実績があり、今年3月にモスクワで第2回目を開催。今年11月の東京での開催を非常に楽しみにしているとの事。私達も協力を約束した。

以降、自由見学。

13:30 リジェント・ストリート自由散策

・ リバティアー・デパート等

夕食 (於: ホテル近くの「わがまま」)

9月26日(月)

09:00 ホテル出発後、「古いロンドンのモダン建築」を途中下車しながら駆け足見学。

・ タワーブリッジを抜けロンドン市庁舎

ノーマン・フォスター設計のロンドン市庁舎は、その昆虫を思わせる巨大な概観で、見る人の度肝を抜く。しかもそれがかの歴史的建造物、タワーブリッジのたもとに位置するというコントラストが、いかにもロンドンらしい。

・ ミレニアムブリッジからテート・モダン博物館

こちらは、近代的なミレニアムブリッジのたもとに、古い火力発電所の巨大なレンガの煙突が空に突き抜ける。これが内部を改装して超コンテンポラリーな美術館に変身した

テート・モダン博物館。その内部の圧倒的空間には声もでない。

チェルシー地区へ移動

11:00 **KLC School of Design**訪問

同校は、英国の代表的インテリアデザインとガーデニングのプロフェッショナルスクールであり、町田アカデミーと提携関係にある。ちょうど訪問した時期には、町田アカデミーの教師が、難関のディプロマ取得の研修中で、毎日夜中まで課題に追われているとの事であった。

英国の資格制度は、日本のように国家試験による国の資格ではなく、関連企業の組合(union)により運営されている。それぞれの学校で、ディプロマ取得後、仕事の現場で研鑽を積んでいく。

英国でのインテリア関係の教育機関は、内容により下記の 3 タイプに分かれるが、同校はその 3. にあたる。

1. インテリア・アーキテクト (建築系)
2. 高卒ぐらいを対象とした、日本で言う専門学校
3. すでにこの分野の業務についているプロ向けの養成機関

KLC 校長とお会いし、学園の概要をお聞きしたところ、やはりプロ向け教育と言う事で、実践的かつ広範な教育を行っている様子。E ラーニングにも力を入れており、海外にも数多くの在籍者を持っている。

同校は、チェルシー・デザイン・センターという、インテリア関係の企業が多く集合している(その数は 100 社程?)コンプレックスの一角にあり、帰路、同デザインセンターを見学した。この建築がまたユニークで、六角形 5 階建てのビル 2 棟をつなげている。それぞれのビル中央部は中庭のような大きなアトリウムとなっていて、そこが商談を行ったり軽食を取ったりするコミュニケーションのスペースとなっている。あくまでプロが、ビジネス目的に集まるスペースである。

◆ DECOREX :

ロンドンにて開催のインテリアデザイン関係見本市 (家具、家具用生地、照明、カーペット、壁紙等) <会期>9 月 25 日 (日) ~28 日 (水)

<開場>未定

<URL> <http://www.decorex.com/>



12:30 「DECOREX」見学

「100%デザイン」が若手やコンテンポラリーなデザインに重きを置いているのと対照的に、こちらの展示会は、すでに知名度の高いクラシカルな物を中心に展示しているようであった。特に主催者の説明は聞かなかったが、展示会の規模としては「100%デザイン」と同じぐらいではないだろうか。これほどの展示会を、新・旧対照的に同時期に開催し、そこに多くの人が集まると言うのは、やはりインテリアに対する人々の関心の深さと歴史をを感じさせる。

16:30 ピカデリー・サーカス付近自由散策

19:00 ミュージカル「オペラ座の怪人」観劇

22:00 夕食（中華街にて）

9月27日（火）

09:00 チェックアウト後、バスにてロンドン発。車中より、

- ミレニアムを記念して建てられた、ノーマン・フォスターやリチャード・ロジャースによる近代的建築物
- バービカン地域の保存コンクリート建築
(イギリスではコンクリート建築は醜い価値なき物とみなされがちだが、この地域のもはその歴史的意義から例外的に保存されているとの事。)
- 外壁にテラコッタを使用した、大英帝国時代の装飾的建築物として残る、ラッセル・ホテル
- 最近若者に人気の市場のあるカムデン・タウン

等を見ながら、目的地へ向かう。

11:00 リッチワース・ガーデン・シティー

田園調布のモデルとなった都市開発として、日本でも知られている。

1900年ごろ、ハワード卿の「田園都市生活構想」に基づき、レイモンド・アーウィングにより設計、開発された。このアーウィングもまた、モリスの思想の影響を受けた一人である。

19世紀後半のイギリスは、産業革命以降の工業化により、空気汚染・都市汚染がひどく、公害問題も深刻であった。Smog（スモッグ）は、当時英国でできた、smoke(煙)とfog（霧）

との合成語である。この反省から、自給自足的田園生活（現在で言うなら「環境共生」に近いイメージか？）が提唱された。

多層階級の混合居住という観点も考慮されており、低層共同住宅、長屋建、2戸一、戸建住宅等さまざまなタイプの住宅が混在するが、全てに共通するのは各戸に必ず相当広い庭(菜園)があること。また共有地の緑も豊富にとっていて、その豊かさは日本の田園調布などとは比べものにならない。

現在居住者 30,000 人。ちなみに、住居の価格帯も中級程度と言う事。

これから訪問する、中世の町コッツウォーズ地方の方が、はるかに高級と言う事であった。

13:00 ハムステッド地区

1920～30 年ごろ、多層階級の居住 (Mixed-Habitation) を意図して開発された住宅地域。

◆オックスフォード (OXFORD)

オックスフォードの街を歩くと、若やいだ落ちつきが感じられる。英国最古の学園都市ならではの雰囲気。学者たちの集会場として始まったオックスフォードの歴史は、12 世紀に遡り、今も 30 を超えるカレッジ

(The University of Oxford) が学問の道を究めている。

ロンドンの北西約 90Km。車の場合は周辺の 4 つのパーク＆ライド無料駐車場に入れ、中心部へはミニバス・サービスで入ります。鉄道でロンドン (パディントン駅) から約 1 時間。バスで Oxford City Link ロンドン (ビクトリア・コーチ・ステーション) から 100 分。ヒースロー空港から 70 分、ガトウィック空港から 2 時間。



15:00 オックスフォード・シャー

オックスフォードと言えば、世界有数の大学名。ところが、そのオックスフォード・ユニバーシティとは、47校のカレッジの集合体で、それがオックスフォードという町を形成している。例えば、“クライストチャーチ”“マートン”“クイーンズ”等はそれぞれのカレッジの名称。カレッジは独立していて、独自の寮・図書館・チャペル等を持つ。もともと、英国の大学は、12 世紀に神学校として設立され、目的は聖職者を教育する修道院なので、そのキャンパス自体がまさに教会建築。その集積がオックスフォード・シャーで、町全体が中世の荘厳な教会の塊のようである。また、外壁がこの地域で採掘される“ハニー・カラー・

ストーン”と呼ばれる、文字通り蜂蜜色をした石灰岩(ウーライト)であるため、町全体の色が深みを帯びた黄褐色で、大変ユニークで美しい。

現在人口 100,000 人、うち学生は 14,000 人との事。

ちなみに、オックスフォード建立から程なく大学が建てられたケンブリッジは現在 31 のカレッジから成り「オックスフォードは大学の中に街があり、ケンブリッジは街の中に大学が在る」と言われているとの事である。

「不思議の国のアリス」「鏡の国のアリス」の作者ルイス・キャロル(本名チャールズ・ドジソン)は、もとより子供好きで、当初は学生としてその後は数学の教官としてクライストチャーチに在住中、学長の娘アリス・リデルに、オックスフォードの日常生活と空想を混ぜたお話をしていた。それを後にまとめたのが、この 2 つの物語である。という事で、アリスは実在の人物であった！！

17:00 コッツウォルズ地域

この地域は最近、歴史的にも観光的にもまた居住地としても脚光を浴びているエリアである。ロンドンから西に 200 k m 程の美しい丘陵地帯。13~14 世紀頃羊毛産業の集散地として機織り・貿易の利益で栄えた。その後産業革命の時期には衰退するが、最盛期に地元の石灰岩(コッツウォルズ・ストーンと呼ばれる青灰色の石灰岩)で建てられた豪華な建築物とその町並みは変わらず残り、今や重要な観光資源、または高級住宅として再生している。と言う事は、半世紀以上にわたり同じ建造物が人に住まれ、使われ、生かされ続けていると言う事で、われわれ日本の歴史/文化では考えられない事である。近年は住宅としての人気が高いそうで、究極の田園生活が営める地域として、その不動産価値は、通勤時間 2 時間というロケーションにも関わらず、ロンドン中心部と変わらないそう。その背景にはイギリス人の「古い=良い」という価値観 — つまり、これほど長い歴史を経てきた物は素晴らしく(classic)で、したがって保存せねばならず、当然価格も高いという考え方があってこそ、このような魅力的地域が存在しうるのであろう。

地域全体に数十の集落が散らばり、今回はその代表的な村を 2ヶ所散策した。

・ バートン・オン・ザ・ウォーター村

街の中心を流れるウィンド・ラッシュという白鳥や鴨がのんびり浮かぶ美しい小川と、そこに架かる 5 つの石橋が、街全体の雰囲気をかもし出している、この地方で最も人気のスポット。民宿やレストランも多く、別名「リトル・ベニス」とも呼ばれている。到着したのが夕方だったので残念ながら商店はクローズしていたが、街の雰囲気は堪能。

・ ストウ・オン・ザ・ワールド村

参加者全員が集まれる最後の夕食を、レストラン”Wyck Hill House”でとろうと言う事になり、この村に立ち寄った。このレストランも、中世の豪商の邸宅をホテル/レストランとして使用しているもの。食事はもちろん、素晴らしい芸術/工芸品と、庭の一部である田園歩きが楽しめる。食後一同は後ろ髪を引かれながらバスでホテルへ向かう。

宿泊：予定が変更になり”The Holt Hotel”へ。

これも、我々の期待をはるかに超える古い石造の瀟洒なホテルで、一同大満足。

9月28日(水)

早朝、スウェーデンハウスの4名はスウェーデンに向け出発。

10:00 バイブリー村

やはり、鱒や鴨が泳ぐコルン川という澄み切った流れと、それをはさむ石造建築物郡が美しい。ウィリアム・モリスが「イングランドで最も美しい村」と称えた街である。川のほとりには1650年に建てられた、ツタの絡まる「スワンホテル」があり、同ホテルは花の咲き乱れるガーデンでも有名。「アーリントン・ロウ」は、緩やかにカーブした坂道の両側に、古く手入れの行き届いた、そして人間生活の香りのたっぷりする石造りの建物が、豊かな緑や花と共に連続する、素晴らしい家並みである。これこそまさに街並みの美しさの原型だと感じた。

◆ケルムスコット・マナー (KELMSCOTT MANOR)

ケルムスコット・マナーはウィリアム・モリスのお気に入りの別荘でした。師匠にあたるラファエル前派の画家、ロセッティとの共同で手に入れた別荘ですが、モリスの妻ジェーンとロセッティの関係をめぐっていろいろなドラマがあった家としても有名になりました。場所はコッツウォルズの南東のはずれ、大学町オクスフォードの近くのケルムスコットという村にあります。マナー・ハウスの横にはテムズ川が流れており、モリスはこのテムズ川を船でロンドンと行き来をしていました。このケルムスコット・マナー、今はウィリアム・モリスの博物館になっており、毎週水曜日の公開日（夏季のみ）には、多くの人々がモリスの遺作を一目見ようとやってきます。観光客に説明をする係りは、すべてボランティアの方々です。また、すぐ近くには、モリスの生涯の友人、フィリップ・ウェブの設計したメモリアル・コテッジという建物があり、その切妻には、ウェブがデザインし、彼の弟子であるジョージ・ジャックが彫刻した「田園に憩うウィリアム・モリス」のレリーフを見ることができます。

Kelmscott Manor,
Kelmscott, Lechlade,
Glos. G17 3HJ



◆ケルムスコット・ハウス (KELMSCOTT HOUSE)

現在は個人宅となっていますが、ウィリアム・モリス・ソサイアティの本部が置かれているコーチ・ハウスと地下は毎週木曜日と土曜日の午後2時から5時の間だけ、一般に公開されています。1780年代に建てられた家で、当時は『隠れ家 (The Retreat)』という名でしたが、1878年にウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96) が入居し、『ケルムスコット・ハウス (Kelmscott House)』と改められました。これは上記のマナーハウスにちなんだ名です。テムズ川沿いの2つの家を船で行き来できることをモリスは気に入っており、ここがモリスの終の棲家となりました。

晩年、モリスは新たに印刷を手がけるようになり、『ケルムスコット・プレス (Kelmscott Press)』をこの近くで立ち上げました。上記、右端の写真がその際に使われたアルビオン印刷機で、現在も稼働可能状態でケルムスコット・ハウスに展示されています。



Hammersmith London W6 9TA

Tel. 020 8741-3735

12:00 ケルムスコット・マナー

いよいよ、旅の最後のハイライト、ウィリアム・モリスが最後に居を構えたケルムスコット・マナーである。

モリスはロンドンでの芸術や社会運動等幅広い分野で華々しい活躍をされており、自然の中での静養場所としてケルムスコット村に 1570 年頃立てられたこのマナーを、芸術家であり仕事のパートナーでもあるダンテ・ガブリエル・ロゼッティと共同で借りた。しかしロゼッティやモリスの家族をめぐる問題で、当初はこの素晴らしい屋敷でゆったりとした生活を営む事は難しかったようである。私達一同は今回の旅で、これまでモリスの多岐に渡る才能・活動・作品を見てきたが、この最後の地で、図らずもモリスのプライベートな心の葛藤を垣間見る事となった。この詳細については、あらゆる研究や解釈がなされ公にされているのでここでは触れないが、この個人的エピソードがまた、今日のモリスの評価をより一層高めていると言えるのではないか。

ロゼッティが去り次の共同居住者を得てからは、モリスも幸せな時代を送ったようで、ケルムスコットの田園的平穏は、彼の活動をますます活性化していった。ロンドンに「ケルムスコットプレス」という印刷会社（現モリス・ソサイエティー）を設立したのもこの時期である。

1896 年モリスの没後、家族はロンドンを引き払いそこにあった全ての備品・作品をケルムスコットに移す。モリスの妻、ジェーンの死後は、優れた刺繍家でもあったモリスの次女

メイ・モリスが、父ウィリアムスの業績と作品を残すべく晩年をささげ、オックスフォード大学との協力のもと、ケルムスコット・マナーをウィリアムス・モリス記念館として立ち上げた。

と言うわけで、ここケルムスコットには、すでに訪れてきたロンドンのモリス博物館やモリス・ソサイエティーに比べ、かなりプライベートな調度品や作品が残されている。例えば、モリスや家族が使用したベッド、テーブル、椅子等家具や、家族の肖像画等。その他、彼自身のアンティークコレクションもある。そのせいか、展示備品への接触は厳しく禁じられ、ロンドンの2ヶ所より随分管理が厳しいように感じられた。

また、敷地も他の2ヶ所より圧倒的に広く(田園生活なのだからアタリマエだが)、元の母屋、馬小屋、納屋、菜園等が全て改装され、入館案内、レストラン、記念品売り場等に利用されている。

14:00 ロンドンへ出発

さすがに6日間の疲れがでたのか、帰途のバスで聞こえるのは安らかな寝息ばかり……。

ところがロンドンに着くや……

17:00 サンダーソン・ホテル

ガイドのミナミさんお勧めの、コンテンポラリーなホテルで一休み。

概観は全くなんの変哲もない古臭いカーテンウォールの中層事務所建築。ところが内装は典型的モダンインテリア。やはりこれも、とある価値ある建築技術の保存のため外壁はさわってはいけないそうだ。まあ、その方が訪問者としては意外性が楽しめるかもしれない。フロント前には、一見支離滅裂なソファやオブジェが散らばっていて、ロビーには真っ白い長いオープンキッチンのようなバーカウンターがある。どこかで見たような……と思ったら、やはりあの、浅草のアサヒビールの本社ビル(泡ビルとウンチビル)を設計した、フィリップ・スタルクの設計。せっかくなので、町田団長のお計らいにより、部屋の中まで見せていただきました。全てステンレスと真っ白のファブリックというデザイン。一歩入って、「ウワー、ステキ!!」とダブル感嘆符の後「汚さないか心配で寝られないかも……」と言う声も。

19:00 ミュージカル「ライオン・キング」観劇

夕食(於:近隣のレストラン)

9月29日(木)

09:00 ホテル発

10:30 ヒースロー空港着

13:00 ヒースロー空港発 (VS-900)

9月30日(金)

08:40 成田空港着

(文責：森 正代)